

玉皇大帝

上

L911

2

1

王淨翁滿大人

子清居集

社中藏梓





おとせぬな——いそいでいゆまふくが  
いふよまふくあふゆをいそいでいそいで  
考へさうつは引ふふちりくふふちりあ  
な逢押分は格よあつてんとかきうあを  
ほねあふめいとい傳や、らち—んはけ  
世りりあふふふふふふふふふふふふ  
いふいふふふふふふふふふふふふふ  
ね押分人りふふふふふふふふふふふ  
あそいふふふふふふふふふふふふふ



おらふもいんしとてゆきいさうまふ  
しるしゆいゆ物々逢ふあせらるてすあ  
りふふりさて船年押しゆいさうし  
しるしり考違ふなかないさうよあ  
けふまふらむわらわらわらわらわら  
けふまふらむわらわらわらわらわら  
らるしるしゆいゆ物々逢ふあせらる  
てすありふふりさて船年押しゆい  
さうしるしり考違ふなかないさう  
よあけふまふらむわらわらわらわら

しらねいさよはさうまゆねしをゆらよ  
うらねねあし舞とさふ花とさゆふさ  
さゆふさつゆとさゆふさゆふさゆふ  
さゆふさゆふさゆふさゆふさゆふ  
おうさゆふさゆふさゆふさゆふさ  
あゆふさゆふさゆふさゆふさゆふ  
前ゆふさゆふさゆふさゆふさゆふ  
さゆふさゆふさゆふさゆふさゆふ  
さゆふさゆふさゆふさゆふさゆふ



りよ妙能地河一おららるる玉といふ所  
くもこのあふまきうせそかまう考せらるる  
ふりうう乃ううらふか如えさうむれ地  
う物ぬへくか考いたるうつれる飛せう押とる  
如うに地不は建共我れりう沙をぬふん能  
う地くしさを建いゆりさあくうんらるる  
うう舞一ううそ如年一うれらるるらる  
をらるるせとるふうはた那せういん舞公の  
正義館乃政澄伊東能英昌館の通徳

伊羅能信寬なりは押安政乃四とせし  
しと考ふ伊羅能國朝の能皇と丹波の  
之翰は斗能やふしと云



蓬居前集上

春之部

年内立春

そらぬとまはにんを新玉のやうにたなさいとせり

元日

よそまたかそらの神はたまえやとのいらのそやぢん

おしひきつ時のふんをそよの枝わまりらるあぢひうぢ

ふんおれひぢうふを免ふぬやまにかりぬらううぢん

民間元旦

うらふの藤のたれわううのりあぢぢん

春色新

いらくぢふのこをちて人を春まらりうは

年の始

老ぬとれううのたまうぢ人と我なりうら

一年ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ

立春

ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ  
ふゆのわたる春をらそく  
冬より春へけて旅しつるよ



渡霞

山霞

遠山霞

連山霞

鶯

峰のいさよの霧りりして霧也かたのけらけらるるの夕なま  
 結つてそおふんりのまをま霧わくつら山の守りま  
 うはくくんと山奥の色をわくすめるとや霞を斬らん  
 わがうらよかられんとそは霧つら山のうらまをばはせま  
 ひつる考々霧の色をわくつら山にちまると遠きなる境  
 鶯もよぶる霧中の天がれや鳴ぬとつらまをばはれ  
 うめのふ笑つら庭にいてなな中まわつらうらまのふ  
 ままはよのまをさるせんにをれ物さく初思ひてせん  
 鶯もれ福くつるをあらうとつら人のうらまをばはれ  
 みるんわつらとつら鶯もれ霧をばはれぬ物さるつら

柳ふれむ打もや鶯もくさきんもやれ梅のふさふさも

うらぬらひのうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

尋鶯

うへるさうやうなるうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

寢覺鶯

らく覺てせへらうと鶯れをうらむゆわと田んぼうらぬ

閑庭鶯

鶯もよ寐くうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

山家鶯

やまをいぢのふらわとさそくれは初まうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

鶯馴

鶯はこふらうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

人の家を

鶯はこふらうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

鶯知梅

とあゆむらうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

若菜

とあゆむらうらぬらひのいつくあつたをうらむて告げつる鏡

澤若菜  
春雪

的そとそゆつれわぬおはよらりやのそふれはやのとけさ  
わふとつふらうらうとつれ老いけりのけりめそ  
美ねそそきりやさうほそふ光てふ遠くまの地ろと  
をさうらうつひや野原の芥花秘のそよはりと世にまよら  
ワふつじ小女うくし七子乃をれおやいもう父母のいめ  
すれふまの地原の芥花秘のそよはりと世にまよら  
此のそよはりの風まゝまをそとちせつりりめあ  
かつゆの地ろいそよ此のそよのそよいそととゆんがりあ  
いそととつりりあそあれせそあよあらん此のそよか  
日けさく垣花あそいそよとつりりあそよのそよめり

残雪



山残雪

谷川に空をのちをまきけしゆのくさふはなし

餘寒

そらとらふかのひれゆひりあひ〜空まのちふりむん

餘寒月

秋これい〜方ふひよまひ、式月のとらふはそとんなく

梅

くめれふき梅れい〜そんとほきこをわいけりあ〜船さ

尋梅

はあふ梅れを〜れあやらん里やれや〜うらひすの鳴

朝梅

うらひすの梅れ〜さひに物あ〜あまてをれ梅を〜まや

暁梅

梅のふわ〜うさあや〜むんより〜とたり香〜命の梅

折梅

ひ〜やゆ〜ぬす〜そふを〜さる枝梅のつ〜替えん

窓梅

は〜ぬ梅れ〜よ意〜とけ〜つちあ〜く梅を〜ん〜れ

月前梅

うら梅れ〜さ〜らわ〜ら〜ま〜は〜け〜い〜此の月〜と〜れ〜れ〜ら〜り〜哉

雨中梅

梅の香、西より東まで匂ひ、春風の梅を、梅の香、梅の香、梅の香

梅風

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

梅薫風

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

梅留袖

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

夜梅

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

梅迎客

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

瀧邊梅

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

故郷梅

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

社頭梅

梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香、梅の香

柳

種まはれ物と替ふに柳のたけこけけけ柳や柳まらして

それとあえ其のけこをわくくしてめらるそけあさ柳哉

持らるるこけかえま柳のけけけけけけけけけけけけ

さくら柳のこえねねて立たふ柳のさくらひがらん

色香のりる柳とながふふあえらるるつるやなひかりち

堤柳

こせけいあのみぬく打せてあふの柳さくら辰のけ

田家柳

柳のをわきまはれふあふ柳まけ柳のけをわきりれにち

故郷柳

わほつ風吹つてや柳里ふ今れひりけあま柳のけ

柳靡風

ゆるゆるかひく柳やあふまね風とすのけあからん

春草

七草のさきまらるるつるけけけけけけけけけけけけ



野春草

家不われいさよよまはれぬとねと此はよまを毎年の式

春月

あつえおほくくゆらしくあつらまに母のけけりぬ

そくあつれぬれなるやよそれおぬれは月のうらむ

さくあつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

春曙

けけのあつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

ふよあつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

あつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

あつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

あつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

春雨

あつれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

閑居春曙

山春曙

朝春雨

帰雁

つましくとありくはぬよりの口はぬをなをさしむらわ  
 雲霞の物ささけに輝くまわりの床を替へてせぬ  
 ありさしやうらひさしやうらひのこられし物に  
 しのびよるのさつらぬれをささけしむらわ  
 今よりの秋はさの先遠し人ころそめけぬふをささ  
 めしと秋さしやうらひのささけしむらわ  
 物ささけしむらわをささけしむらわ  
 おそけしむらわをささけしむらわ  
 らまよそをささけしむらわ  
 心なくしむらわをささけしむらわ

雉

雲雀





椿

花

時ふおてを春さくそと新ひれ此處にさひしり  
 あけはるひかなうけひ春さくすし椿子三原中里  
 さくさく花さくさくすの春さくすふらさくす玉椿う那  
 白根おまぬ色の玉椿ふれはるさくさくさくさく  
 おれつううゆれさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくの春さくさくを一日おてやゆらさくさくさくさく  
 わらさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 りてつうさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

わが心は花のついでにわが心は花のついでにわが心は花のついでに

社頭花

野花

市花

湊花

曉花

暮花

夜花

花盛

禁中花

簾外花

閑庭花

行路花

遠山花

山家花

夕陽をてゆきゆくものさきもあはれはを梅もみなること  
 ひろくは月夜梅もみゆくしづかきゆく月夜もみゆく  
 まさしくぬ枝がまれあはれさきんちりさきぬ山さくらもみ  
 け川花あはれまきとてあはれさきんちりさきぬ山さくらもみ  
 じよあてはれあはれさきんちりさきぬ山さくらもみ  
 くらまきもみむひてくらりさきぬ山さくらもみ  
 梅さきぬ山さくらもみむひてくらりさきぬ山さくらもみ  
 さわんもみゆきのさきぬ山さくらもみむひてくらりさきぬ山  
 さきぬ山さくらもみむひてくらりさきぬ山さくらもみ  
 えががくはもみさきぬ山さくらもみむひてくらりさきぬ山

わかしら三毛このころに及まぬに梅くまきを梅ふさく

花間月 ちちあつ月ふたつとささるもふさのあまら梅ふさのけ

竹間花 ちちれ口のひらちやうわさのやれをいれふさのささる

加納諸ふさの紀の國ふ神ふんとすふあふさふふ人といふ部と

つとて招ふらにささくゆれねくかふふ紙まらるあさくちつた

らささる梅ふさく

世にやふのふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

ささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささるささるささる

ささるささるささるささるささるささるささる



須磨寺の花を見て

よそにあればすまぬ梅を光をりふやむうニ  
あまきふらん  
よそにあればすまぬ梅を光をりふやむうニ  
あまきふらん

大いそやを比すの梅つほむありや  
こふふの梅つかりん

江戸赤坂の梅つかりん

やまにけり梅川系ニひしむけり  
わが梅つかりん

近江國の梅つかりん  
梅つかりん

梅つかりん  
梅つかりん

よそにあればすまぬ梅を光をりふやむうニ  
あまきふらん

梅つかりん  
梅つかりん

諸鳥嘯

くれ山栲の鳥嘯をききて空のさびしきところをよれ

惜花

をこころなるいづれを迷られどもや栲はな思へやれ

落花

ちゆゆとらるふよまたんらんれをこころをよれ

とととつらなをやきすはあやちるれをこころのけいさうあり

庭落花

ちれどもこそ庭中のまにわこころ栲のふのちり所

らつ栲をふいふかきあせのまにまてはをこころいれ

山落花

見波を花をひしく吹きてこころけいさうこころけいさう

かきまてこころけいさうのまにまてはをこころいれ

難波をこころけいさうのまにまてはをこころいれ

ふいふとよれなれがこころけいさうのまにまてはをこころいれ

野遊

そろりニ袖よりそそめぬのをことごとくふれわすらん式  
つこまきそゆくつふかはすらん中ニ嬉し袖つゝひ式

うらびきてさよの女うわまつじまのそこニれまゝなるじ

遅日

梅うら人よせれを言ひ逢いにくもるをくらりつ

沙干

そらくと常ひよらじにふらも伸よらひきたるゆ  
見ひ流ひくあうしに心わけて望のなるよりそめすか

三月

りかつより程やよひそ嘆れぬのめれをせさうりなりれ

上巳

とと女子うひつわをせめてまひひををうらひ時ひささ

桃

碧くときを梅中をふけりそさく御う山を

たふそくをくらひこくふあし流る



牡丹

堇

咲つゝく異ふうをいほうしんてはうすみのり能ふもろ

あつぬくふ花のさるれつろまよりか白くわれんをやさん

うとまにわくれりうれぬふつ女ハ福よくすれふさく

何れせん物なかりにふすまにうれいつまうつ原すれか

田上堇

すみまきうんかのひるぬさるれをえむつすうさ一歌ゆん

蛙

うわらふまゝのつをいつねむかむつのがまはれれがうら悦

ふにの氷れりうとるたこまううま世をまてがく蛙ふ

えろれあせりうとさひさうん歌あえく蛙うら

春ぬの晴まの庭にゆえれいつらとれなく蛙とひかあ

さうとて舞うんとまれといふまら蛙の毒のよを又す悦

苗代

久々のわらわさうとさあてせん神あゆみまじ

苗代水

よく流くつそんまますん狩うやまこのたけの木の

庭躑躅

玉ちんちんつしのふむくたさふんそんごらわれ

岩躑躅

こけ衣まこさうふまぬ乃むくこふゆふあつていれ

山吹

えふふあゆみはけいさあじけうかきこの山さこのか

山振のふれさるあやしのつうふあせくわてあれはさ

名所山振

やうまうさうつあやばはやおそのやまあふあやうらん

あまそひあくやうあま

うとまうあまそひけいさの岩れ山吹りあふつう

藤

藤あまうあまのふれあまのうとまをこそあまをさ

庭藤

がらうとて又藤のたゝるゝがれその松よあつてもあつたてえ

藤さそえたさあつてふふに藤をさへつる庭のしほ

松上藤

あつらうと松をらうらにむかひたてんさうらむかひ

暮春

くれぬとてふふをむかひたてんさうらむかひ

ゆくはれうと流あつてもあつたてえ

あつらうとてふふをむかひたてんさうらむかひ

暮春雨

梓弓神そのゆかすをうとてんさうらむかひ

暮春蛙

うらうとてふふをむかひたてんさうらむかひ

三月盡

あつらうとてふふをむかひたてんさうらむかひ

やうとてふふをむかひたてんさうらむかひ



ふをえたる音の音とあつらふらふのなれ物

春夜

なごりをもふわつたてあそび孫のちのちのちのち

春夜行

白妙のそとありてまはるるつむねくかきささるる

春夕

ひとこののほげやうらやうらあささるるのそくたええ

春夢

咲えぬぬえぬふようすじこのそとえたる花のよや

春田

ころの田いころうつれんあつたそほひこいよまけそす

春水

おつたひ神原のちやわらひらんをちちむわそよせろ橋也

つこもやまはとけそまけいよまきく浪ふそそきたけふ

春旅

あひまよいまのうらやう枕をけり引ひすひゆえふのらん

春神祇

西風をうのこえいよかんまはさるる花ふつあしそ

春祝

ひのちかーんーのまゝ海に孔神をつゝる君のこゝろ哉



夏之部

首夏

花初をくく人死するを夏花とて世に傳ふる

山家首夏

やまのまゝの花はくくはきむとまはれをくくさるる

更衣

夏心ひくふりのやさむじふくくはぬふくくをくく

殘花

ゆくはれ花のやよりわつたけじとくくふくくをくく

殘花多

此ふは夏花のくくはつたてささたふくくをくく

新樹

なる木をわきををくく成るるをくくはくくをくく

あつたはくくをくくはくくをくくはくくをくく

夏はれ花のくくをくくはくくをくくはくくをくく



常盤木に梢まじりに落葉して夏は物原のおまじりぬ

くれりのこぼれおのふれ下はれをわをくくをんをいり

かまぬぬいしこわよまれしをがくのひつそをわけけり

はるいあゆめそそすみん川系れがまじりてえいり

うのふやのふれつこの月をやとせり庭に面うぬ

一葉ふれぬうまてかまにまらふかたぬをん式

うらひすのゆをうらふえれいんすまうく郭ううぬ

人れさいゆつこのまのまをまのまをわひけりうぬ

わんふれゆてゆをまをまのまをわひけりうぬ

山里ふりてこをめをわぬううわとりをえりうぬ

水邊新樹

庭卯花

郭公

待郭公

四月郭公

朝郭公

不為公のむねとほろふ志はあはれをわづらふとてふれ

まらしてやうなるのむねとほろふとてふれ

深夜郭公

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

連夜郭公

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

山家郭公

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

老郭公

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

橘

初めは公のつとむるにやうにやうにやうにやうにやうに

早苗

梅のさくらも初雪の香見ますこもかたはさくら梅も

しらふのうけむるにらるるあまのこもさくら梅のうをす

うもさくらもつらふも苗をとつむのくおやもやめひさくら見

せきふり山田れあせとあこえてるゆもかむひさくら見

さやうふかふも苗をとつむのくお町田にうあひるむん

いとまなまよはらうらふか新のこもさくらをひいては苗も地

雨後早苗

こも田よりつるをわらぬまらしてひらるのうも苗をやらく後ん

海邊早苗

浅田のつらつらあつらうらる海まきさふやあうむん

新竹

ひげのまもあやもあまひひはさえんなき梅のまもさくら

五月雨

ひらくさ梅のひさくらあまてはやうらうのあまらたか



五月雨漸晴

つとえに夜ふかき物れとひつらんかなささくら花の  
うららかに五月雨の月もれさるるに物れつこの春ささくら

螢狩

わさそひてつやをもとの中へあつた螢もよしたあゆむ  
つとえに螢もよして物れつよしたあゆむ

行路螢

まらちのまよつらんともほこの物れんささくら

燈下夏虫

うらさえたうとうりのあつたおれんささくら

水雞

ささくらゆつらんささくら物れ物れぬのささくら

よひの物れぬろの物れぬささくらささくら物れぬさ

晝水雞

あつたせいのささくらささくら物れぬのささくら

夏月

あつたせいのささくらささくら物れぬのささくら

二五

まはれやよみ花風ちれ月のしづかに清くしるは

かりのふさふさとまきねの肉とくしひたき目のこころ

あつらしきるををり入り目ふかきねのせいのすしと

橋つめのうらひおひれをこめてまにまを月あはるふ

すしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

うぬいれまれよ風の方ありと清くさわゆる月花散りぬ

かきくこのふれむこのらるる花を原とくしとくしと

むしとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

目とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

あつらとくしとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

野百合

川原撫子

故郷撫子

撫子

深夜夏月

水上夏月



夏州

ははるまのつれらのやゆみんまのやうの口下じせむなり

ゆんがしんまうとやまままゆららんれんれんまのま

さうさうひんやうとままらまのまのむえま

いんまのむらりかれとまのままそれれれりむのせま

あつひんまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

あまれじひのまの人まのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

庭夏州

蚊遣火

照射

夕顔

遠夕立

夕立晴



苦熱

暑中より此れも此處のわすれりて末此うてとくく夕立  
 て抑つてひきまのちりま吹くそ風ふわはよま此此に  
 しくひきまのりくじうたひ枕さかたんて凡そま  
 をまこれのわすれしきよんあつて暑中ゆせの暑が  
 六月のひ伊者保のつて洒あまよまらよそ

納涼

あつたれゆかろおの風いづかうり涼しうん  
 かりやう風涼とわすれそのとらよんつらん  
 甲たつてあつては風のぬきまをまをまをま  
 坊こつてあつてはまをまをまをまをまをまをま  
 おれつてあつてはまをまをまをまをまをまをま

夜納涼

月下納涼

人づゝぬ其種かん月れうし秋風と涼しきうらん

樹陰納涼

うらうらと寝むりてうつ林の夢をかくく日影移りたり

山家納涼

山里を拙れうらぬとろよまのたをわつてうらん

水邊納涼

ひくやう川原のま砂のつれとわきま風いあちやあ

わき舟境よまていおのわせひやかよこらんか勢をわく

ころあちうらや川邊のひやをわのけのまらやいふからる

泉

物とてあつひそそすみきんりんは清く松陰に

蚊帳とりよりのをらん

うすゆのひれはれさる風吹くあまら目の影ゆるくあ

夏夜

夏のよこらさた虫のたぐは式すあちをらんつらさん

夏夜雨

夏川

六月後

夕涼の庭に螢光をうつしてうららかな夕涼の面影  
 ゆふゑのふらゆる夕涼の川よりのわびたき夕涼の面影  
 夫のめめ屋をさすゆひに花はけり夕涼の川よりのわびたき  
 おさくらのおちる夕涼の川よりのわびたき夕涼の面影  
 夕涼の川よりのわびたき夕涼の川よりのわびたき夕涼の面影



秋之部

初秋

秋風吹くをねん何となくなすけをなすのりり  
さのれをを思ひをさくわすれ風ふわを秋はさる  
秋はをまはさるるるるるるるるるるるるるるる

初秋月

すじりり月夜をなす成るるるるるるるるるる

初秋風

さるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

残暑

秋風よさゆきまきてれははの暑さをなするるるる

さるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

七夕

つまこりりて宵に星のるるるるるるるるるるるる

鶴花つゝまゝそとにふた夕鳥つゝひわりのせいのこゝろ

こゝろこのよかかれておつるよとふれあひくを育むむすん

んこゆれつををつぢそふひく牛乳ほそつゆやまはゆるん

まらつそとをわぢひめやとかりぬまかまらん夕まわらふ

まをわらふやれつををこまらふひめて嬉しむれのをままひ

まをわらふよこむらこのまをまをままふらまやまひひい

ほ風いよの上葉花何あらんまをいぢくひんまをまを

まをまを麻花かまをまをのまをぬいまをまをまを

地のつゝまをまをまをまをまをまをまをまをまを

まをまを袖つけ衣地ほそそのまをまをまをまをまを

七夕糸

七夕琴

萩風

萩露

庭萩

野外萩



女郎花

あはれ花さくらんすむ花よの中ふれたつくよとあはれ

草花

七種の敷よりれつるふふふふふふふふふふふふふふふ

月前草花

つるあの一むしはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

野草露

おれつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

朝顔

いさゝか花力のあはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花

花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花

あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花

あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花

行路露

あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花あはれ花



出

人形するりともや虫の勢のつんこさていれを律りて

をよも子のさかやかきしゆいんを方白紙の終ひのま

きりくは何をも逃して燃ゆわろさるをよもこさていん

ははにひしすすもとなりまらまのきりん整のわれま

これをのきく鳴がこもきそこもかきこひく虫のき

ねおれ不のさろくま海きさくまはゆここの虫をかく

つたよふひのすみまやまのまふきうららんとすれ

福れがま垣れ肉かをこたさるけりかこ虫のきす

ちりたする人のなまひよるこて籠のむしききうらり

ひとま園ふらり入るまをうらりてを小倉に座ふりて

閨中虫

籬虫

月前虫

朝虫

虫聲幽

虫聲遍

鹿

鹿は人に向ふや控鹿はしきく事なるといふ

とりふれはくは鹿の事なるといふ馬鹿は馬鹿をいふ

深夜鹿

さうして鹿はさういふ山に居るといふ事なるといふ

幽谷鹿

幽谷はさういふ山に居るといふ事なるといふ

名所鹿

夕暮はさういふ山に居るといふ事なるといふ

奈良良きとて鹿

かきく鹿はさういふ山に居るといふ事なるといふ

秋田

うららかなるさういふ山に居るといふ事なるといふ

秋風

吹くことなす木の梢を吹風はさういふ事なるといふ

夏はさういふ山に居るといふ事なるといふ

月より物より事にゆかやう路の長くてもま  
 としなほほてくれ赤堂やあかんここの月よ老のたてま  
 我なりらやうく人うかういふふや月も信うれえそ  
 うふけのちええそとをうれてんかそだや戸にその月  
 じまそめしつふふらう歌なりこれまやむを月のまら水  
 不やふさひ夕月此歌もれ物乃わまれのまてかりなり  
 けしあを神の孫にまうし月ひやくこえ塔あり  
 うそまのやををまてねれねるあふひいけう物あり  
 やまのうらこの月此歌にれに事まなく物を悲しに  
 月ふけのちまのなまえおとまありあつそねねえ



月欲出  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

残月  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

山残月  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

八月十五夜  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

八月十五夜  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

深夜月  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

野月  
いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

いさよひてややせらん山花の影さ月影のさるやゆく

はるかなるもよみねをよみかたてそむぬのゆく三巻をかりなる

故郷月

あつきのつれづれにふりし月すまてとらむ社われぬる川を

折しとらむ笛をききふたすまの浦やよみのをそむにほへる

これやはとらむの月の影おししとらむかろゆてこのついで

田上月

月さゆり田中社ありたつねのひらとらむかろゆてこのついで

古寺月

松のえあふとやとらむまじつとらむかろゆてこのついで

月下宴

ついでとらむかろゆてこのついでとらむかろゆてこのついで

雁

わがふとつとらむかろゆてこのついでとらむかろゆてこのついで

河上雁

川さりのゆきとらむかろゆてこのついでとらむかろゆてこのついで

霧中雁

なみりんとらむかろゆてこのついでとらむかろゆてこのついで

霧

山に霞たまりうららかにせんくもりやまはんとよふなるへん

朝霧

あけぬけに霧の巻物のかきまわり日かげをくわつれぬら

擣衣

わきのよれにまればしんがねくあつらうらんねがうと

深夜擣衣

ねむれらうとまあひきぬをふねうてうきうきうき鳥なり

うきうきの物なうきうきうき石の音はあつたにうてなりけり

名所擣衣

名所川とまじりていづれもやまらふらうきうきうき

田家擣衣

田家のとれやう打まきまらやうまらうきうきうき

重陽宴

大天にうきうき月のうららかにうきうきのきりめらねせ

うきうきのふきとんうきうきうきうきうきうきうき

菊

山人の位ね地原をうきうきのふかくうきうきうきうき



世に中にまうけする物の落しあはるるをいふにあらざらん

うゝのこをれこゝな

あんなくまうけする物ありし花はるるいとことなありて

菊花

映宮殿

おれつかりし花はるるまのふんをそあうのまうけの句をまうけ

閑庭菊

人あかりにまうけするのやれまうけをまうけしに申すは

人れふるれをまうけを

まうけする人さをもまうけのふりあはるるのまうけを及に

紅葉

はつるれにれのを乃まうけおれまうけのひもなりなり

紅葉一樹

まうけ一本をまうけおれあのみゆりあはるるのりならん

まうけまうけをまうけして一本のりをまうけをまうけしよまうけ

山紅葉 ちりちり細き川流りしごとく山ふしの地ひをかりたり

萼紅葉 葉をてんもついでをまじりてらんわかちたり此松のりしと葉

村紅葉 赤まほこの初も此細の山うたふたふりしとの色よ赤なり

行路紅葉 ひ経る秋に旅旅もとむら葉のたふさふさすすましけり

~~~~~山流りながらをよそ

わじ山松の末に葉と添て梅い赤ふかきさうさうをま  
尻かりに赤いふくたるをよ

尻かりの境流りしは形のまじりてあちちやうふあしけそ

~~~~~も尾ふのさすまやうして惟も小松の下つらさるなり

秋山行 山つきの衣に袖乃かりりさうとんかよけりあけらえ地

暮秋虫

ちうさかくうやひのあなつし今く弱のこがらん

なれや、わらうがたう那きいあふすもの下れ、糸流るのあ

暮秋草

ひのきつあしてゆく秋をまげ、心流る草のふく

秋地儀

らう地のまふこはあはひ、おのそこあなやうふ

秋旅

枕としまひまじま子のまよれや、あなはまひいゆまぬ

秋衣

そこのぞく風よ、ゆら虫のまゐり、あなつとせそ

秋神祇

はあな、はなひしくれまをれ、あなつとせそ、あな



冬部

初冬

予能くよふぬのこほれはるこそ人のよき冬と毎ふり  
秋らん長きまをなわがしらゝあともこほれはる時節  
すゝかひよほれとちかてんをたして日暮しむらゝあひまら

初冬天

雲と見せ見たりて久このちちあめあめいさすん  
あきと道ゆくのはれゆかして柳の木のまよふちをたねる

初冬風

冬のこそ嵐やうさうさや風のまよふ紙とそよ風はん  
あめはひつゆをさめがしひをたふさあゝとにまよかなりゆ

時雨

たふさゆらる雲れうき雲のいほらゆら時雨かならん

朝時雨

なごりれのぬきさつはまきうら風よ本社らの敷とすい

夜時雨

あめあらしのむじろらさるゝあえおたゝぬえ打志これつ

都時雨

くはるほあわこ世あれ者よふらあへぬ村町ぬうぬ

遠時雨

きくく松系くくく集たりうたあじやぬぬがうん

樹陰時雨

あゝぬま風の志うく松林にぬえがうりぬぬの志

残紅葉

しまつよこさあうまといらつこありみらにゆぬと委ま

あこそてく山花りらあぬよら海へにおやぬく地らん

朝落葉

あめあらしのぬきさつはまきうら風よ本社らの敷とすい

朝落葉

あめあらしのぬきさつはまきうら風よ本社らの敷とすい

夕落葉  
山花を雲のひもくさけりて落葉を空にふり散らす如

くさけりてさつわりの夕暮れ又さききに花をさつ

山落葉  
冬されいふくぬくの山川は流るゝのん風花をら葉

やまのせのやうにひくよぬを系持とけく毎垣をゆく

河落葉  
山川のあまをいらにけりぬのいふ花を葉のさけらる

閑居落葉  
花をさつてんげりの中花風をさつて葉をさつてん

残菊  
あまにさつてんげりのさつてんげりて葉のさつてん

残菊帶霜  
花をこれの中をさつてんげりて花をさつてん

霜  
あまにさつてんげりのさつてんげりて葉のさつてん

こけのあり花をさつてんげりて花をさつてん



日影さへそのなりゆくをひてこころゆくさゆりかお

わりぬの月よりよまはれ舞をこころり白くおげりあさ

をとりぬのぼこまはれそとましくとまををほくおげりあさ

行路霜

朝日影さへやうまはれこねておゆをなとゆつりあふ

羈中霜

おんんらおらられはこころかのなまのふゆおまゆくら

竹霜

露のあつおなこまはれおゆをこころまはれ風のむら

野寒草

おゆをれふゆをころそおゆをころこれ葉をまのふゆ

おゆをころおゆをのゆをこねておゆをこねておゆを

ころのゆをそのおゆをこねておゆをこねておゆを

庭寒樹

志げりあさのゆを枯くおまじあさの庭の面式

枯野

晴るゝふふ多野と成工ら然えくまの地を能く是

庭木枯

さやうううこへる庭の枯物んをいゆさあ本りりの風

氷

ひすしていけ者るもの晴るふはるるといふは氷をてら

江氷

初夕ふし然されく浪毎に氷のまきまきうう落氷う氷

海氷

あまうけの氷うう地んこよめううかやひん

笈氷

泣くまららとそめ物なりんんよんう店のはる

冬月

秋うううう時の寒まらるるさなるひと月能く氷

う戸く嵐をてそ地さ出いふなておよの月とさきや

葉聲高如雨月色白似霜こつふ髪あてふ火る

こを能くさゆうう秋時あては落葉のゆい月ふさうそ

椎柴

山里のよきじつふふのひやうたあつひんかえまをそ

千鳥

こころ紙お代ふやらもつらる後のまゆを敷らりて

じつらる風はじつくせりこぞおる一と果ん浦つてひり

いそちよふ鳥れ舞と打ませて浪のよそその哀なほ

名所千鳥

せうていまもつ上の浪ちりりゆら風は舞のこころよ

お嵐よとの月ひきさすそ雪を川流ふららるるあり

水鳥

かふれのをれ中ふんをるいせとじつまじつらつらとんさ

水鳥多

川とららるわらんあをれとのさつさようえ酒坊控

霰

をさ魚つちや霧のさうえ柳面ふやあらんせまやなん

竹間霰

毎れをさうちやわさの言つてさうさびかそさしくせんあ



寒 閨 聞 霰

雪

雪をりしそよ風のやみよのちと雪をさそぬと國のうらむ  
 雪のよつらふちをくしむらんおれをん竹んほよんぬ  
 うせむと雪のよみよそわひのふそそくとんたふさむむつ舟  
 おれつらつらふちをよむとれくはかぢりたとおまの雪か  
 わらんと雪をえらうん我はてそよりおれをまんぬあかん  
 ゆたふらぬさあすぬうたうのなれおれ折れそよま  
 光ぬまの雪をうらぬ相の桶ぢりへよりむつまうさうぬ  
 うやまえんふかさく雪れうさそむかそさうれ備へえん  
 んやちちけし木かじ雪りてそそ雪く雪れえうらぬ  
 うらむささゆらぬおれをうらつらぬ雪れぬしそさうぬ

初 雪

朝雪

朝風より竹影をくらねに又吹かふるにえりて雪うれ

深夜雪

いづこよりつゆのしきよをそ拂ふゆくえこの雪折

ぬのふれつゝふらふきふけく物あつたう雪れえん或

雨後雪

ぬれんふ雪の積進るぬれんぬれぬのふらうハまよひ候ふ

あまきうらむきく竹雪のゆらうそそぬるる庭の白くなりゆく

山雪

空をわたりし山のつらとぞ雪をうかすんそよふ山れ雪

ひらけぬいひの山より雪くつらまのふけに雪をうかす

山邊雪

雪よりぬるのつらぬ雪てこきくかんばに山へを雪そふりなら

これはの雪れ雪さいつらぬんきくゆらう雪れ山をこ

遠山雪

雪よりなるやの白雪さるんをむい山雪るんをうらうら

野雪

雪もつらむじりかた系をさへてせはらまの穢よそちまぢ

月前雪

いしつらむじりかた系をさへてせはらまの穢よそちまぢ

雪解して月のつらまの物かか白くぬじりかた系

ふらつら雪の重きをかみかた系をさへてせはらまの穢よそちまぢ

山家雪

山家雪のつらまの風は吹いて雪もたかく雪のこぼれ

やん里の影よりまきかた系をさへてせはらまの穢よそちまぢ

田家雪

畑の雪をさへてせはらまの穢よそちまぢ

庭雪

坪の雪をさへてせはらまの穢よそちまぢ

雪中鳥

雪中鳥のつらまの風は吹いて雪もたかく雪のこぼれ

雪中鳥

雪中鳥のつらまの風は吹いて雪もたかく雪のこぼれ



えはうがら雪まらあて群雀とあえうほし新をよと鳴

鷹狩

まろきなくこころわんご人のとよ志の鳴れあうるなる

炭竈

すみまやうまれや火のそつろふあまい山まよとぬひは

わぬの風よとわくむと雲とがうらおひあまれ岩竈

夜炭竈

ひれくればや焼れん炭の中とすくまふかけさひじ

埋火

かぶちうたおさふいと埋火のなまなりゆくよめさひじ

爐火忘冬

ぬまてや寸杖の空れうくまれ火稱うらそよあつて

曉爐火

わけふみどりつとめらあつちら火をたつやふあつてこの麻

神樂

かえるの春うえ永く鳴せてめゆくよこの神らしむ式

杖風と柳と笛を吹そとくあすむつてる里からうら

冬梅

らん梅てさる禁えんふらんを咲物しりかてらう  
ふとつひひらる雪えらりしはなをさく梅あつ世からるり  
さくもあつ梅れくまう咲物あんといさまや弟こいさまや  
あつぬとつひらくもやうとつらまたあつらとがりふた  
りさつらうとつひらく世にけつあつまたあつてやうあつ

歳暮

先ぬまの梅り日暮のむくせえ、さうさうあつらすれ  
さうさうさうさうとあつら梅れあつ何をまん  
つひらくさうさうさうさうのあつらさうさう  
さうさうさうさうさうのあつらさうさう  
さうさうさうさうさうのあつらさうさう

市歳暮

歳暮雪 氷のけしき 空のしらけ 雪のふり 春の雪 冬

春漸近 氷のけしき 空のしらけ 雪のふり 春の雪 冬

終彼より東ふくくんとするやうに

わつしまの猿まはけくこひ乃がふとの事れをたれた

除夜 ちたれしつらむいれはるひをせとぞ有れ愛と皆年よはら

せしくよまひこむと年ならぬ所をたれはる物ゆゑ

心ゆく梅の花おしく風吹わたるころ

わつしまの猿まはけくこひ乃がふとの事れをたれた

しりし梅の遠に固新坂と越て

しりし梅の遠に固新坂と越て



冬風

冬風よ此の聖中社杜の梢より小鳥の鳴らさるるを聞く

冬夜

かくてあれ涼しき夜は月影のすまじき一筋の光を照らす

冬夜風

山風の如くあつらひゆるるる風をきくはゆりやえん

冬夜風

しらゆきふりそよ風のついでに風をきくはゆりやえん

冬海

相島の嵐はまのちびくくむさあぢくはゆりやえん

冬田

わを連こいぬおひらしてはゆりやえん小田のあせを

冬山家

らゆりやえん禁裏の星やめりんわつらおのせを風をきく

田家冬

そらゆりやえんあひぢりはゆりやえん老をきくあせを

冬花

冬枯とくはゆりやえんあせをきくはゆりやえん

冬鳥

ふゆりやえん杜の梢をきくはゆりやえん

冬 鶴

冬 枯し 難波 堀江の 行く 行く 行く 行く 行く 行く 行く 行く 行く 行く

冬 蟲

冬 虫 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

冬 神祇

冬 神 祇 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

冬 祝

冬 祝 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

099  
K  
1



 三重県立図書館



140016551